

表6 日本の高校生における教師評定SDQの平均得点 (標準偏差): 学校種別、男女別

全日制

	全体 (N=701)	男児 (N=433)	女児 (N=268)
総合的困難さ TDS	5.4 (5.0)	6.0 (5.0)	4.3 (4.6)
情緒の問題	0.8 (1.6)	0.8 (1.6)	0.8 (1.6)
行為の問題	0.8 (1.2)	0.9 (1.3)	0.6 (1.1)
多動・不注意	2.3 (2.2)	2.6 (2.3)	1.7 (1.9)
仲間関係の問題	1.5 (1.6)	1.7 (1.6)	1.2 (1.4)
向社会的な行動	5.8 (2.8)	5.4 (2.8)	6.5 (2.8)

学年による平均得点の差は、仲間関係の問題は、3年生では1年生、2年生よりも有意に困難と評定された($p<.001$)。それ以外の困難さに関係する下位尺度は学年による違いは有意でなかった。総合的困難さは3年生では1年生よりも有意に困難と評定された($p<.01$)。向社会的な行動は、3年生では1年生よりも有意に低く評定された(向社会性が弱いことを意味する)。

性による違いは、困難さの尺度では、情緒の問題以外では有意差があり、男児の方が有意に困難さが大きかった(総合的困難さ $p<.001$; 行為の問題 $p<.01$; 多動・不注意および仲間関係の問題 $p<.001$)。向社会的な行動尺度では、女児の方が男児よりも高かった($p<.001$)。

定時制

	全体 (N=233)	男児 (N=150)	女児 (N=83)
総合的困難さ TDS	9.2 (5.7)	9.3 (5.5)	8.9 (6.0)
情緒の問題	1.6 (2.1)	1.3 (1.8)	2.2 (2.4)
行為の問題	1.7 (1.8)	1.7 (1.8)	1.6 (1.7)
多動・不注意	3.4 (2.7)	3.8 (2.7)	2.9 (2.5)
仲間関係の問題	2.5 (1.8)	2.6 (1.8)	2.3 (1.8)
向社会的な行動	4.7 (2.9)	4.4 (2.8)	5.3 (2.9)

学年による平均得点の差は有意ではなかった。

性による違いは、困難さの尺度では、情緒の問題では女児が男児よりも有意に問題が多かったが($p<.01$)、多動・不注意では男児が女児よりも有意に問題が多く評定された($p<.05$)。総合的困難さは男女で有意差はなかった。向社会的な行動尺度では、女児の方が男児よりも高かった($p<.05$)。

学校種別の比較では、総合的困難さ、行為の問題、多動・不注意、仲間関係の問題は、定時制生徒の方が有意に全日制生徒よりも高かった($p<.001$)。情緒の問題は学校種別と性の交互作用が有意で($p<.05$)、全日制では男女で有意差はなかったが、定時制では女児が男児よりも有意に問題が多かった($p<.001$)。向社会的な行動は全日制で向社会性が有意に高いと評価された($p<.001$)。